

京都大学人文科学研究所共同研究実績・活動報告書

(3年計画の2年目)

1. 研究課題

インドにおける「循環的存在論」の形成——祭祀思想から哲学への発展を中心に

Evolution of the Indian Ontology in the Cyclic Image: Focusing around the Development Process from Ritualistic Thoughts to Philosophical Views

2. 研究代表者氏名

手嶋 英貴

TESHIMA, Hideki

3. 研究期間

2022年4月-2025年3月(2年目)

4. 研究目的

紀元前一千年紀以来、インドでは「人間などの生命体が生と死を繰り返す」あるいは「世界が発生と消滅を繰り返す」といった循環的イメージに基づく存在理解の方法が発展してきた。とくにインドの「人間観」を代表するものとして、業の理論と結びついた輪廻説がずっと知られ、またインドの「世界観」を代表するものとして世界の反復的な生滅を説くユガ説が有名である。そして、これに類する存在理解の方法は、ヒンドゥー教や仏教の伝播によって、日本を含むアジアの多くの国や地域に大きな文化的・社会的影響を及ぼした。そうしたインド的思想の基礎には、存在の様態を「循環的なイメージ」で捉えようとする共通の思考がみられる。しかし従来の学界では人間観と世界観とを個別に研究することが多く、それらの相互関係に目を向けることが少なかった。本研究はこの共通的思考を「循環的存在論」と名づけてその発生・展開のプロセスを明らかにし、かつ南アジア、東アジア、および東南アジアで共有される社会的・文化的基盤について、新たな視野を開こうとするものである。

Since the first millennium BCE, Indian people have developed viewpoints for understanding how the world and living things exist, especially involving a cyclic image, such as viewpoints that "the world repeats its emersion and destruction forever" or that "all living things are in a continual cycle of birth and death." From those, they have yielded the methodology of "reincarnation" based upon the notion of karmic retribution, as well as that of "cosmological cycle of four Yugas" apparently inspired by periodicity of the natural world. The former is the representative methodology regarding living (including human) beings, and the latter concerning the world which encompasses the lives. Cognate thoughts about the way of existence were spread to many Asian countries/regions by dissemination of Buddhism and Hinduism which functioned as conveyors of Indian thoughts, and, subsequently, culture and

society of each countries/regions including Japan were deeply influenced by them. The "cyclic image" upon which the thoughts in question are commonly based, however, has been paid little attention by scholars, because of the tendency that they explore both the methodologies, of existence of living things and that of the world, separately. In this research project, we attempt to clarify what was the process of emersion and evolution of the "Indian ontology in the cyclic image," in which both the types of methodology are meaningfully integrated and related to each other. This research will provide fresh insights into the socio-cultural basis common among South, East, and Southeast Asian countries/regions.

5. 本年度の研究実施状況

令和5年度は12回の定例研究会を行い、研究計画どおり各回を、古代インド文献『ヴァードウーラ・シュラウターストラ』新月満月祭章講読の部、および班員等による個人報告の部の2部構成で実施した。講読の部では、同章全体の3/4程度まで読み終え、最終成果の一つとして見込む校訂テキストと和訳の公表に向けた準備を進めた。個人報告の部では、本研究班の課題に関連する多様な研究を共有し、最終成果として予定している研究論集の下地作りを進めた。なお、9月の定例研究会ではユダヤ思想の専門家（市川裕・東大名誉教授）を招聘講師として、領域横断的な討議を深めた。全回を対面・オンライン併用型で開催し、参加者は平均して25名ほどである。さらに研究会の録画映像をYouTubeで限定公開しており、各回の平均視聴数は15回ほどであった。こうした録画の視聴は、開催日時に都合のつかない研究者にとって研究会に参画しつづける有用な機会となっており、諸方面から好評を得ている。

6. 本年度の研究実施内容

- 2023-04-24 インドにおける「循環的存在論」の形成 第10回研究会 Vādhūla-Śrauta-Sūtra 2.4.2.33-2.4.3.21（新月満月祭本祭日・献供用匙類の準備）発表者 手嶋英貴 龍谷大学 南インド・トラヴァンコール王室の灌頂儀礼：儀軌原典と試訳、解釈上の問題点 発表者 手嶋英貴 龍谷大学
- 2023-05-08 インドにおける「循環的存在論」の形成 第11回研究会 Vādhūla-Śrauta-Sūtra 2.4.2.33-2.4.3.21 関連ブラーフマナ文献 発表者 手嶋英貴 龍谷大学 カリ期における法的孩子も観 発表者 谷口力光 東京大学大学院博士課程、日本学術振興会
- 2023-06-05 インドにおける「循環的存在論」の形成 第12回研究会 南インド・ケーララ州における Puṇyāha 儀礼とその起源 発表者 梶原三恵子・手嶋英貴 龍谷大学・東京大学 グリヒヤーストラとグリヒヤ補遺文献における Puṇyāha 概観 発表者 梶原三恵子 東京大学大学院 ケーララ州のジャイミニヤー派（サーマヴェーダ）に伝えられる Puṇyāha 儀礼の概観 発表者 手嶋英貴 龍谷大学
- 2023-07-03 インドにおける「循環的存在論」の形成 第13回研究会 Vādhūla-Śrauta-

- Sūtra 2.4.3.22-37 (新月満月祭本祭日・祭主の妻に関する儀礼) 発表者 手嶋英貴 龍谷大学 ジャータカの盗賊譚 発表者 中村史 小樽商科大学
- 2023-08-28 インドにおける「循環的存在論」の形成 第 14 回研究会 Vādhūla-Śrauta-Sūtra 2.4.3.22-37 関連ブラーフマナ文献 発表者 手嶋英貴 龍谷大学
- 2023-09-04 インドにおける「循環的存在論」の形成 第 15 回研究会 Vādhūla-Śrauta-Sūtra 2.4.3.38-49 (新月満月祭本祭日 準備儀礼) 発表者 手嶋英貴 龍谷大学 ユダヤ教の聖俗分節思想から存在の分節化としての法思想へ 発表者 市川裕 東京大学
- 2023-10-30 インドにおける「循環的存在論」の形成 第 16 回研究会 メーダーティティによる『マヌ法典』第一章の解釈 発表者 吉水清孝 公益財団法人東洋文庫
- 2023-11-27 インドにおける「循環的存在論」の形成 第 17 回研究会 Vādhūla-Śrauta-Sūtra 2.4.3.50-2.4.4.2 (新月満月祭本祭日・準備儀礼) 発表者 手嶋英貴 龍谷大学 頭や眼を覆うことと秘義学習 発表者 梶原三恵子 東京大学大学院
- 2023-12-25 インドにおける「循環的存在論」の形成 第 18 回研究会 Vādhūla-Śrauta-Sūtra 2.4.3.50-2.4.4.1 関連ブラーフマナ文献 発表者 手嶋英貴 龍谷大学 河口慧海関係資料の系統と分類：国内研究機関が保有するチベット関係資料の積極的活用に向けて 発表者 菊谷竜太 高野山大学
- 2024-01-29 インドにおける「循環的存在論」の形成 第 19 回研究会 Vādhūla-Śrauta-Sūtra 2.4.4.2-23 (新月満月祭本祭日 準備儀礼：パリディ、祭匙類の置き定めほか) 発表者 手嶋英貴 龍谷大学 Buddhacarita における yad 節 発表者 張倩倩 福州外語外貿学院
- 2024-02-16 インドにおける「循環的存在論」の形成 第 20 回研究会 Vādhūla-Śrauta-Sūtra 2.4.4.2-23 関連ブラーフマナ文献 発表者 手嶋英貴 龍谷大学 ヴェーダの規範に従う「善人」の輪廻について：マドゥスーナの著作 Gūḍhārthadīpikā に見られる事例から 発表者 眞鍋智裕 北海道大学大学院
- 2024-03-26 インドにおける「循環的存在論」の形成 第 21 回研究会 Vādhūla-Śrauta-Sūtra 2.4.4.24-34 (新月満月祭本祭日・準備儀礼) 発表者 手嶋英貴 龍谷大学 聖仙たちの言語 発表者 川村悠人 広島大学大学院
- 2024-03-26 公開シンポジウム『マハーバーラタ』研究の最前線：伝承の形成と物語の展開 (ブラーフマニズムとヒンドゥイズム第 10 回シンポジウム) 『マハーバーラタ』の口頭伝承的特徴について 発表者 高橋健二 東京大学大学院 『マハーバーラタ』に描かれた王権儀礼の特徴 発表者 手嶋英貴 龍谷大学 古代インド叙事詩の神器戦における記憶と呪句の役割 発表者 川村悠人 広島大学大学院 ヴィシュヴァルーパー物語の伝承と変容 発表者 堂山英次郎 大阪大学大学院 指定コメント コメンテーター 水野善文 東京外国語大学大学院

7. 共同研究会に関連した公表実績

2024年3月26日(火)13時~18時に、成果公表シンポジウム『『マハーバーラタ』研究の最前線—伝承の形成と物語の展開—』(於:人文科学研究所・大会議室)を開催した。4つの個人発表と指定討論者によるコメントおよび総合質疑を行った。対面・オンライン併用型によるもので、事前参加申込み322名、現地参加者約60名、オンライン参加約200名と非常に盛況であった。なお、当日参加できなかった人も含め、参加申込者には後日シンポジウムの録画をYouTubeで共有し、タイムシフト視聴による参加もできるようにしている。専門研究者だけでなく、多くの一般参加者(中高生含む)があり、高度な学術交流と、幅広い成果の発信を両立させることができたと考える。

8. 研究班員

所内

岩城卓二

学内

天野恭子(京都大学大学院文学研究科)、横地優子(京都大学大学院文学研究科)、虫賀幹華(京都大学白眉センター)

学外

手嶋英貴(龍谷大学法学部)、高島淳(東京外国語大学)、中村史(小樽商科大学商学部)、梶原三恵子(東京大学大学院人文社会系研究科)、堂山英次郎(大阪大学大学院人文学研究科)、西村直子(東北大学大学院文学研究科)、川村悠人(広島大学大学院人間社会科学研究科)、尾園絢一(広島大学大学院人間社会科学研究科)、大島智靖(東京大学死生学・応用倫理センター)、高橋健二(東京大学大学院人文社会系研究科)、山城貢司(東京大学先端科学技術研究センター)、塚越柚季(東京大学大学院人文社会系研究科)、眞鍋智裕(北海道大学大学院文学研究院)、伊澤敦子(東京大学文学部)、菊谷竜太(高野山大学文学部)、矢野道雄(京都産業大学)、井田克征(中央大学総合政策学部)、大木舞(日本学術振興会)、吉水清孝(財団法人東洋文庫)

9. 共同利用・共同研究の参加状況

区分	機関数 (必須)	受入人数					延べ人数				
		総計	海外研究者	若手研究者 (40歳未満)	若手研究者 (35歳以下)	大学院生	総計	海外研究者	若手研究者 (40歳未満)	若手研究者 (35歳以下)	大学院生
人文研所属 (内女性)	1	1	0	0	0	0	1	0	0	0	0
		(0)	(0)	(0)	(0)	(0)	(0)	(0)	(0)	(0)	(0)
京大内 (人文研を除く) (内女性)	2	5	0	1	0	0	24	0	3	0	0
		(3)	(0)	(1)	(0)	(0)	(10)	(0)	(3)	(0)	(0)
国立大学 (内女性)	6	13	0	1	2	0	88	0	8	6	0
		(0)	(0)	(0)	(0)	(0)	(0)	(0)	(0)	(0)	(0)
公立大学 (内女性)	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
		(0)	(0)	(0)	(0)	(0)	(0)	(0)	(0)	(0)	(0)
私立大学 (内女性)	0	4	0	0	0	0	8	0	0	0	0
		(0)	(0)	(0)	(0)	(0)	(0)	(0)	(0)	(0)	(0)
大学共同利用機関法人 (内女性)	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
		(0)	(0)	(0)	(0)	(0)	(0)	(0)	(0)	(0)	(0)
独立行政法人等公的研究機関 (内女性)	0	1	0	0	1	0	5	0	0	5	0
		(1)	(0)	(0)	(1)	(0)	(5)	(0)	(0)	(5)	(0)
民間機関 (内女性)	0	1	0	0	1	0	8	0	0	8	0
		(0)	(0)	(0)	(0)	(0)	(0)	(0)	(0)	(0)	(0)
外国機関 (内女性)	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
		(0)	(0)	(0)	(0)	(0)	(0)	(0)	(0)	(0)	(0)
その他 ※ (内女性)	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
		(0)	(0)	(0)	(0)	(0)	(0)	(0)	(0)	(0)	(0)
計	9	25	0	2	4	0	134	0	11	19	0
		(4)	(0)	(1)	(1)	(0)	(15)	(0)	(3)	(5)	(0)
※「その他」の区分受入がある場合 具体的な所属等名称を記載：例) 高校教員 無所属の場合は機関数0とカウントし、この欄の記載不要											

10. 本年度 共同利用・共同研究を活用して発表された論文数

	共同利用・共同研究による成果として発表された論文数			
			うち国際学術誌掲載論文数	
①人文研に所属する者のみの論文(単著・共著)	0		0	
②人文研に所属する者と人文研以外の国内の機関に所属する者の論文(共著)	0	(0)	0	(0)
③人文研以外の国内の機関に所属する者のみの論文(単著・共著)	0		0	
④人文研を含む国内の機関に所属する者と国外の機関に所属する者の論文(共著)	0	(0)	0	(0)
⑤国外の機関に所属する者のみの論文(単著・共著)	0		0	

本年度発表されたインパクトファクターを用いることが適当ではない分野等

	雑誌名	掲載 論文数	掲載 年月	論文名	発表者名
1	Ivan Andrijanić & Sven Sellmer (eds.). Vedic Roots, Epic Trunks, Purāṇic Foliage. Dubrovnik International Conference on the Sanskrit Epics and Purāṇas, DICSEP publications, vol. 7. Zagreb: Croatian Academy of Sciences and Arts/New Delhi: Dev Publishers & Distributors.	1	R5.6	The Evolution of the Kuśa-Lava Episode: Its Vedic Origin, and Variations in the Epic and Post-Epic Texts	Hideki TESHIMA
2	西南アジア研究 no. 96, 2023	1	R5.6	古代インドにおける婚姻 についての一考察—ヴェ ーダ文献に見られる妊娠・ 出産の葛藤を巡る神話か ら—	天野恭子
3	Ivan Andrijanić et al. (eds.). Medhótá śrávaḥ I. Felicitation Volume in Honour of Mislav Ježić on the Occasion of His Seventieth Birthday. Zagreb: Croatian Academy of Sciences and Arts/New Delhi: Dev Publishers & Distributors.	1	R5.6	Notes on the "Lava-Kuśa Episode" in the Kathāsaritsāgara	Hideki TESHIMA
4	南アジア古典学 vol. 18	1	R5.7	『マハーバーラタ』の神話的構造をめぐって：沖田瑞穂著『マハーバーラタ、聖性と戦闘と豊穡』みずき書林（2020）書評論文（1）	高橋健二

5	第51回可視化情報シンポジウム 2023. 講演論文集	1	R5.8	古代インド文献の祝詞共起関係性の視覚的分析	天野 恭子 (共著)
6	Vincent Eltschinger, Jowita Kramer, Parimal G. Patil, and Chizuko Yoshimizu (eds.), <i>Burlesque of the Philosophers. Indian and Buddhist Studies in Memory of Helmut Krasser.</i> Bochum/Freiburg: Projektverlag.	1	R5.10	Differences in the Exegetic Attitude to Scriptures between Mīmāṃsā and Vedānta	Yoshimizu, Kiyotaka
7	Hiroko Matsuoka, Shinya Moriyama, and Tyler Neill (eds.), <i>To the Heart of Truth: Felicitation Volume for Eli Franco on the Occasion of his Seventieth Birthday.</i> Wien: Arbeitskreis für Tibetische und Buddhistische Studien Universität Wien	1	R5.11	On the Alternative Definitions of niyoga in Prajñākaragupta's Criticism of the Prābhākara Mīmāṃsā	Yoshimizu, Kiyotaka
8	<i>Journal of Indological Studies</i> vols. 34&35, 2022-2023	1	R5.12	etad va esabhyanutka in the Maitrayani Samhita. The Beginning of Didactical Verse Embedded in Narrative Prose	天野恭子
9	<i>Journal of Indological Studies</i> vols. 34&35, 2022-2023	1	R5.12	The "Mental" (Mānasa) Self and Mānasa the Creator in the Bhṛgubharadvājasamvāda (Mahābhārata 12.175–185)	Kenji Takahashi

11. 本年度共同利用・共同研究による成果として発行した研究書
なし

12. 本年度博士学位を取得した学生の数

	人数
博士学位を取得した学生の数	2（学内1・学外1）

13. 費目の30%を超える大幅な変更があった場合の変更理由
なし

14. 次年度の研究実施計画

令和6年度は11回の定例研究会を行う。『ヴァードゥーラ・シュラウターストラ』新月満月祭章は、残り1/4の講読を完了するべく着実に進めていく。個人研究報告では、とくに本研究班を通じて学びを深めてきた若手研究者（博士課程在籍者やPD）の登壇を促し、その研究成果の共有を行う。内容的には、研究班のメインテーマである、循環的イメージを軸とした儀礼と思想の連繋の解明に力点を置き、最終成果のとりまとめにつながるよう討議を深めたい。今までと同様に、全回を対面・オンライン併用型で開催し、録画映像をYouTubeで限定公開する。これと並行して班員をはじめとする研究会での登壇者は、本研究班の成果となる学術論集の執筆作業を行う。『ヴァードゥーラ・シュラウターストラ』新月満月祭章の校訂テキストの作成は、写本データの所有者である井狩彌介（京都大学・名誉教授）が行い、研究会を通じて作り続けているその和訳文の最終的な仕上げは、班長の手嶋英貴が行う。

15. 次年度の経費

		開催回数	延べ人数	支出予定額（円）
国内旅費	一般旅費			
	招へい旅費	12	25	450000
海外旅費	一般旅費			
	招へい旅費			
謝金（講演謝金、研究協力者金、その他の謝金）				
消耗品等経費		郵送用封筒等		20000
その他		シンポジウム広報媒体費		180000
合計				650000

16. 研究成果公表計画および今後の展開等

成果公開の機会として、インド思想史上においてダルマ文献が果たした役割、それがインドの文化・社会に及ぼした影響をテーマとするシンポジウムを開催する。なお、2023年度シンポジウムで好評を得た『マハーバーラタ』の最新研究を広く公開するために、専門家と一般人の双方を読者として想定する書籍を、株式会社法蔵館より刊行することが決まりつつある。いっぽう、より専門的な学術論集、さらに『ヴァードゥーラ・シュラウターストラ』新月満月祭章の校訂テキストは、ウェブ上でのPDF公開が望ましいと考えており、京都大学リポジトリ（KURENAI）等で公開する可能性を探りたいと考えている。